



南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標
 求めよう、神のちむがなさを！
 守ろう、沖縄における人権を！
 探そう、真の平和への道を！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
 カトリック那覇教区本部
 TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
 発行人 W.F.バートン司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2019年11月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第732号 (11月号)



11月 死者の月

主よ、みもとに召された
 人々に永遠の安らぎを与え、
 あなたの光の中で憩わせて
 くださいますように。

那覇教区の恩人たちー 沖縄で宣教司牧に奉職され亡くなられた司教、司祭の方々



十一月は「死者の月」です。

教会は初代教会の始まりの頃から死者のために祈ることを大切にしてきました。死者の月が十一月二日に定められたのは、十一世紀初めの頃だと言われています。その後十一月全体が死者の月として、死者の記念が行なわれるようになりました。

この月には三つの大きな祝日があります。一日の「諸聖人の祭日」、二日の「死者の日」、そして、今年十一月二十四日があるキリストとなる「王であるキリスト」の祭日です。これらの祝日は、互いに関係深い意味を持っています。

一日の「諸聖人の祭日」は、キリストの愛によって

結ばれ、キリストのもとに集まって賛美している者たちの日。また、二日の死者の日は、この世の「命」を終えて、今は「永遠のいのち」を生きている人々を、記念し、祈り、諸聖人に取り次ぎを願います。そして、「王であるキリスト」の祭日には、イエスを永遠の王として賛美を捧げるのです。

教会は、死者のために祈ることにより、生きている人だけでなく、亡くなっ

た人をも含む、交わりの共同体であるという考えを深めてきました。この世を去った人々のために祈りながら、私たちは、死者の中から「復活された御子キリスト」に従う私たちの信仰を強め、死者の復活を待つ私たちの希望を不動のものとしてください」と祈ります。

それは、私たちがキリストの愛に結ばれ、永遠への命「復活」への信頼こそが、死者のために祈る意味をより深くしてくれると知っているからです。そして、亡くなった方々の事を思い起こしながら、自分自身もよい死の準備をしていくことができるようにと祈るのです。

死者の月はまた、典礼年間の終わりの月でもあります。「王であるキリスト」を祝った翌週の主日から、

待降節が始まります。待降節はキリストの二つの到来を待ち望む季節です。第一の到来は、降誕祭で記念する救い主の誕生です。待降節が進むにつれて、日々の典礼は主の降誕に向けた準備としての内容が増えてきます。

第二の到来は、終末のときのキリストの再臨です。年間最後の主日が「王であるキリスト」の主日であるように、待降節の直前にあたる「年間」の終わりの期間で、教会はキリストの再臨を記念してきました。待降節は、この主の再臨への待望の内容をそのまま受け継いで始まります。

救い主の来臨に向かう長期の準備に心を向け、再臨への熱い待望を新たにしている日々の歩みを進めて参りましょう。



“ALONG THE WAY, SOMETHING GOOD HAVE HAPPENED”

By: Sr. Terry Caytor, OND



The theme for this year's Gathering for Christ is "Migrants: Igniting the Flame of God's Love, Faith and Hope." What is more real is the preparation for the event itself. Saying "YES" is much easier than what it seems to be. People were excited and had a vision of a wonderful gathering but I was a bit ambivalent and had this question in my mind; do these people have an idea what they are up to? But as the Spirit moved, that "Yes" brought us to a great group experiences of unity, generosity, courage, boldness, patience, openness and letting go and letting God in the midst of experiences of anxiety, disappointment, discouragement and displeasure; chaos; impatience disagreements especially in letting go of one's idea and accepting that of the other.

Igniting the flame of God's love, faith and hope implies a commitment to make that little ember aflame and blazing. It means opening oneself and going out from one's comfort zone. It asks us to be challenged and to challenge others, to listen to the anger of a tired companion who feels discouraged and disappointed and to praise others for a job well done, for the effort exerted in order to reach a certain goal. It means reaching out to those who have walked away because they felt slighted or discouraged and to remind them of their worth. It also means accepting one's limitations and being humble to welcome help from others.

There was one goal, that is to make the event happen and every one had contributed in any way. There were surprises and discoveries; coming out of group members who are amazingly generous in their resources and skills. And much more is the highlight of how some of our elders in the parish, our Japanese brothers and sisters who eagerly offered help. The women group immediately planned to make little as Omiyage for those who will attend. It did not stop there, there is these couple who continued to ask how they can help and really offered more help. Their gesture was so touching.

All those anxieties at the beginning slowly disappeared because God worked surprisingly in every individual and in every hindrance. As I look back now, I am amused how easily members were persuaded to do certain tasks. I have witnessed how easily anger have cooled down and how a discouraged friend easily turned into a being inspired in just a blink of an eye. To whom could we credit those things but to God's grace. Truly the mission is GOD's. God invites us to share it in different ways and sustains us along the way.

It may not be the perfect preparation for everybody but for us in Miyako island especially those who gave their best, it brought us to the experience of betwixt and between that made us a different individuals, different group. Definitely, along the process something good have happened. To God be the Glory!

NPO 法人ぶどう園の会
訪問看護ステーションクララ

TEL&FAX:098-937-5001
 住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

- ・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)
- ・営業時間 8:30～17:30
- ・営業日 24時間365日(緊急対応含む)

**看護師
募集中!**

教室案内 池坊いけばな
椿ちゃんの部屋

沖縄市与儀、
 ファミリーマート(サミット比屋根店近く)
 日曜日 4時～6時 約1～2時間
 月謝:4,000円/3回(花材費別 1,000円程度)
 TEL:090-4471-1288(松田香翠)



教皇様の来日に思うこと...

日本の教会にとって恵みの時

デニス・フェルナンデス神父

小祿教会 主任司祭



教皇フランシスコはアルゼンチン出身のイエズス会会員。ヨーロッパ以外から選ばれた初の教皇である。全教会の指導者に選出された時、アシジの聖フランシスコの名前を名乗られた。アシジのフランシスコを模範とし、謙遜、貧しい人々、弱い人々に対する心構え、世界平和への訴え、自然保存の重要性を大切にしていることから全世界の人々に親しまれている。

十一月二十三日から二十六日まで、教皇フランシスコの日本訪問は大きな喜びをもたらす出来事である。多くの人々が教皇様を見たい、教皇ミサに与りたいと楽しみにしていることでしょう。パパラシスコの親しみやすい人柄、言葉と行動が日本の国民と信徒の皆さんに大きな影響を与えるに違いない。

教皇に任命された夜、宿泊していたホテルまで他の枢機卿達と共にバスで通った。泊っていた宿の使用料を自分で払った時、メディアは彼の謙虚さに目を止めた。教皇として最初のインタビューで「アシジの聖フランシスコは貧しい人として私たちに平和の精神を与えてくださる。そして、現代の教会が貧しい人々のための教会になることを切に願っている」と付け加えられた。パパ様は教皇の住居に住むより、バチカンのゲストハウスに住まうことにし、そこで色々な会議を開催し、来客を接待しておられる。

教皇の司牧的方針は、弱い人の立場に立つて物事を考え、彼らの権利を強調し、難民への関心、どんな人でも受け入れる姿勢から、「人々の教皇」と呼ばれている。選出後、最初の聖木曜日洗足式を拘留所で行い、十四歳から二十歳までの少年犯罪者、十人の男性と二人の女性の足を洗って接吻した。十二人の中には、男女一人ずつのイスラム教徒が含まれていた。二〇一五年十一月六日、一般謁見の時、教皇は神経線維腫症を患っている人に目を留め、車から降りて抱き締めた。世界中の人々が驚き、聖霊に促された行動である、神様の愛と慈しみの真の証であるとたたえた。こういうエピソードは数多くある。

教皇フランシスコの今回の来日は教皇ヨハネ・パウロ二世の日本訪問以来、三十八年ぶりである。来日のテーマとして「すべてのいのちを守るため」を選ばれている。人間のいのちはもちろんのことであるが、経済発展のため自然界を破壊することのないように宇宙万物を大切に使うことに気づかせている。

四日間滞在のハードなスケジュールで、政府関係者に会い、自然災害で苦しむ東北の被災者たち、青年達、そして多くのいのちが犠牲となった長崎と広島の方々にそれぞれのメッセージを伝え、励ましてくださる。日本で信仰のためのいのちをささげた殉教者達の模範に力づけられて、恐れずに自分の信仰を喜んで証するようわたしたちに呼びかけてくださる。戦争の犠牲となった人々を思い出すことによって、過去の過ちを繰り返さないように、また、武器や核兵器では世界平和をもたらすことが不可能と訴えるでしょう。沖縄の土地に足を運んでいただくことは、ウエイン司教様と那覇教区民の切なる願いだった。希望が実現出来なくても、沖縄県民、那覇教区のわたしたちのことも考えながら、お祈りとメッセージを述べて頂ければ何より幸いである。

一言でいえば、教皇が神様の愛といつくしみを人々に感じさせ、多くの人達に神様に出会う喜びを伝える。宣教師として神の国のために日本で働きたかった望みが叶えられなくても、ペトロの後継者として日本の人々を神の国に導く役割を果たす喜びをもってこの地を訪れてくださると考えている。

みんなの教皇とも言われている教皇フランシスコが、八二歳になっても人々との出会いを大切にしていることを自分で体験したことがある。二〇一八年九月、ローマでカプチン会の総会に出席する機会があった。総会の最後にパパ様と謁見を予定していた。正午十二時の予定だったが、突然他の予定が入り、時刻より四十五分遅れてしまった。ホールに入つて来られたパパ様は疲れた様子もなく、笑顔で挨拶し、二四〇人の一人ひとりと握手し、約一時間いっしょに過ごした。パパ様のこの単純、素朴さはわたしにとって忘れがたい、素晴らしい思い出になった。

今回の教皇様の日本訪問が、全国の皆さんにとってあらゆるいのちを大切に守ること、平和への決意を新たにすることが出来るように。また、日本の教会にとって福音宣教活動を新しい希望をもって励むことができるように。教皇様が各地で発信するメッセージに促されて一人ひとりの霊的生活の刷新、信仰生活を深めることが出来るように願っている。

今回の来日が数多くの豊かな実りをもたらすきっかけになつて、教会にとって恵みの時となるように祈りつつ...



那覇教区平和委員会



9月例会の報告 先の大戦の負の遺産 それは貧困

9月の平和委員会の例会は22日(日)に琉球新報の記者松堂秀樹氏を講師としてお迎えした。演題は「本土復帰から四十七年たった沖縄の今」。

松堂氏は自己紹介で講演をはじめられた。自身の祖母、上間敬子さん(コザ教会)、そして母、松堂康子さん(コザ教会)が熱心なカトリックの信者であること、自分が幼児洗礼を受け、洗礼名がトーマス・アクィナスであり、41歳だと云う。琉球新報社に2002年入社。編集局社会部警察担当などを経て2011年四月から東京支社報道部2012年4月～2013年3月までワシントン特派員として勤務した。2019年3月から政治部副部長(県政記者クラブキャップ)になる。

松堂氏は在米中、日米間関係の在り方を巡って、ジャパン・ハンドラーと呼ばれるリチャード・アーミテージやジョセフ・ナイ氏等やシンク・タンクの研究者の考えなども幅広く取材し、沖縄の視点に立って重層的に報道につとめたという。(筆者注:複数の文献によるとジャパン・ハンドラーはアメリカ政府や軍の元高官で、その背後にはアメリカの巨大な軍需企業が控えている。ハンドラーたちは軍やこれらの企業にとって都合な情報を、あたかも議会を含めたアメリカ政府の総意のごとく日本のメディアや政府に耳打ちする。その発言は重要な情報として、東京に伝えられ、全国に流される。アメリカに追従する自民党政権にとっても、国民を納得させられるので都合がいい。)

アメリカから帰国してすぐの2013年、東京支社での勤務を始めたころ、松堂氏にとって強烈に印象に残っている出来事が起こった。第2次安倍内閣が4月28日を「主権回復の日」と制定し、日本政府主催の式典が行われたのである。4月28日はサンフランシスコ講和条約が発効した日で、沖縄が日本から切り離された日で、沖縄では「屈辱の日」と呼ばれている。事もあろうに、その日を「主権回復の日」に制定したのである。会場に駆け付けた松堂氏と沖縄タイムスの記者は入場を拒否された。東京在住の大手新聞社のみというのが断られた理由。粘りにねばって入場して、目にしたものは「天皇陛下バンザイ」の三唱だった。松堂氏は石破茂氏に「沖縄は日本の一部ではないのか?」との質問をぶつつけたが、当然のことながら、明快な回答は得られなかったという。

松堂氏は本題に入ると、最近よく耳にするようになった「子供食堂」を取り上げた。子供に無料か低額で食事を提供する「子供食堂」が全国で3700か所を超え、昨年比で1.6倍となっている。どれだけ子供食堂が普及しているかを表す指標として、小学校に対する食堂数の割合(充足率)を算出する方法がある。それで算出すると都道府県平均は17.3%で小学校6か所に「子供食堂」が1か所あるということになる。最も高いのは沖縄県で60.5%、最も低いのは秋田県で5.5%である。(NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえの調査 2018年)

満足に食卓を囲めない子供たちが増えているのは沖縄で、年収200万円以下のワーキングプアの県内世帯の割合が25.9%、非正規雇用の割合も44.5%で全国ワースト一位。母子世帯の出現率は2倍になっていることを挙げている。次に松堂氏が目にとめたのが沖縄の産業構造。第3次産業(商業、

金融、観光サービス業など)が84%、第二次産業14%(建設業9%、製造業5%)、第一次産業(農業)2%となっている。農業の2%は基地拡充による田畑の強制接収に因るところが大きい。それにしても第三次産業の突出ぶりが目立つ。ワーキングプアの増大が、三次産業の突出に拍車をかけている、と松堂氏は説明する。

話はいっきに74年前に飛ぶ。焦土と化した沖縄。4人に1人が沖縄戦で犠牲になったといわれる。しかし生き残った4分の3の中に、身体障害者5万人、精神的後遺障害者1万人、戦争孤児3万7000人がいたというのだ。昨今話題になった直木賞を受賞した「宝島」のように、基地からの物品の強奪「戦果アギヤー」が英雄視される時代。それこそ皆、生きるのに精一杯だった。子供たちは学校に行くのも大変だった。つい最近まで沖縄では「夜間中学」があった。それは戦後、満足に義務教育を受けることのできなかつた人たちのための学校だ。

1950年代、朝鮮戦争の勃発や中華人民共和国の成立、米ソ冷戦を背景に、米軍は沖縄における恒久的基地建設を本格化し、軍用地を確保するために「銃剣とブルドーザー」によって、沖縄の人たちの家や畑などの土地が強制的に接収される。そして1952年のサンフランシスコ講和条約の発効時点では20%未満だった基地の割合が、1972年の復帰の時点では58.7%に跳ね上がり、現在では70.6%になっている。農業生産の基盤である土地の強制収用による基地が建設されたのである。第一次産業の農業が2%であるのは宜なるかな。

米軍政府の統治方針は占領統治のため、政治、経済、教育などが米軍にとって有利になるような仕組みを取っていたのである。1)「金融支配」による工業化投資の抑制・2)配給物資への依存、輸入物資への依存・3)農業生産の基盤である土地の強制収容による基地建設・4)そして基地建設による労働力の収奪。沖縄経済は基地収入で依存しているといわれてきたが、1957年基地関連収入は県民所得の51.5%であった。

しかし近年観光業の隆盛に伴い基地関連収入は5.7%までにさがっている。現在ハンビタウンやおもろ街の繁栄ぶりを目の当たりにすると、米軍基地は沖縄経済の発展の足枷になっているように思える。

(平和委員 稲福捷夫)



那覇教区平和委員会



日 時: 12月1日(日) 午後2時～4時

場 所: カトリック安里教会

講 師: 呉 世宗 (オ・セジョン)

琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科準教授

演 題: 「沖縄の歴史の中の朝鮮人～加害と連帯～」

カトリック那覇教区平和委員会

問い合わせ ☎090-1949-6569 (稲福)

11月
例会

2019年10月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2019年10月1日(火) 10:00~12:00 開催場所: 教区センターホール(安里教会)

1. 報告及び連絡事項

- ・ 前回(9月会議)の議事録に沿って新田が報告と確認。
- ・ 司会のウェイン司教より、司教、司祭、の休暇、会議、研修会等の不在予定が報告された。
ウェイン司教、10月2日~3日、子どもと女性の権利擁護デスク・司教会議、東京。
10月19日~20日、石垣教会公式訪問。
10月25日~26日、GFC宮古大会出席。
- ロドニー神父、10月7日~11日、J-Carrm会議、東京。
10月25日~26日、GFC宮古大会出席。
- ヨアキム神父、9月4日~10月2日、休暇。
- サニー神父、10月25日~11月20日、休暇。
- 藤澤神父、10月10日~13日、出張、留守番に大野神父来沖。
- マーシーさん、10月28日~30日、カリタス・ジャパン全国担当者会議のため新潟へ。
- ・ 10月26日に行われる GFC宮古大会について、担当司祭のロドニー神父から説明があった。作成したポスターを掲示する等の協力が要請された。
- ・ 10月27日に普天間で行われる「奇跡の主」のお祝いについて、担当のパトリック神父から説明が行われた。同日午後5時から普天間教会で行われる。
- ・ 津波古事務局長より、教皇様の日本訪問に関連して、明日(2日)付けで教皇様の日本での滞在スケジュールが発表になることや、教区内の教皇ミサ参加予定者の現状報告があった。教区内の司祭たちの教皇ミサへの参加は、東京ーブイ神父、マイケル神父、ダノ神父、ロドニー神父、長崎ーナビーン神父が参加予定。尚、ウェイン司教は付添役の1人として全日程教皇様に同道されるとの報告があった。
- ・ 関連事項として、教区司祭たちが県外、国外へ出かける際は、ビザの関係も在るので、必ず司教へ報告、了解を得て出かけるよう要請があった。
- ・ 「福音宣教のための特別月間」について、ブイ神父より報告があった。教区報10月号にも掲載された司教メッセージの読み合わせとともに、この期間祈りと様々な取組みをもって過ごしてゆくよう要請があった。
- ・ 9月に行われた典礼の全国会議について、担当のブイ神父と、会議と一緒に参加した新田から報告が行われた。
- ・ その他
司教からの補足、依頼が行われた。例えば、主任司祭として新たに移動、着任した場合でも、それぞれの小教区はそれぞれ独自の伝統や習慣を有しているので、主任から一方的に伝統や習慣を廃してしまうのではなく、小教区の役員さんたちとも良く相談して進めて欲しいとの要請があった。特に小教区の土地や建物については、勝手に金銭の生じるような貸し借りをしてはならず、小教区役員会で協議の上、司教の裁可が必要である。また、教区内においては、読谷教会が多数のフィリピン人信徒のために、4ヶ所の教会で月1回づつスペイン語ミサが捧げられていることが報告され、基本的に日本国内で捧げられるミサは日本語典礼が優先されるべきこと、ラテン語典礼を含め、外国語でミサが捧げられる場合、司教に許可を求めることが要請された。
- ・ 11月5日~6日の石垣での司祭会議について事務局長より要請がなされた。司祭会議参加の旅費は小教区に請求できるものなので、司祭たちは航空券や宿舎の手配を自分たちで行うこと。5日の午後3時から始まる会議に合わせて集合し、翌6日の午前中までは研修があることを踏まえ、6日に帰る場合の便は午後以降に予約するよう要請があった。
- ・ 韓国、日本修道女会総長会議が、10月28日~11月1日の日程で、安里教会を会場に行われることがマーシーさんから報告された。
- ・ 中神父の七回忌が、教皇の訪日日程と重なるため、教区では11月17日の午後2時から、安里教会で追悼ミサを捧げることが司教から報告された。
- ・ 9月22日に行われた第二回信徒評議会について、ウェイン司教より報告があった。
- ・ 10月25日に ODNシスター達の会議があり、総長も見えられるので、司教も出席の上、宮古、石垣における宣教活動にシスター達の力をお借りできるよう要請する予定であることが報告された。
- ・ 今まで沖縄で働かれた修道会も、会員の高齢化や活動の縮小等で、沖縄から撤退する修道会も出てくると予想される。教区の日等の機会を通して、協力いただいた修道会には感謝の意を表していきたい。
- ・ 小禄と首里、普天間の主任からバザーの案内が行われた。
- ・ 教区合同堅信式の提案があったが、継続審議となった。

2. 審議事項

- ・ マーシーさんより10月の司教訪問予定や、司教の日程の追加変更の聞き取りが行われた。
- ・ カテキスタ養成プログラムについて、担当の新垣助祭の体調不良のため、計画が中断している。司教が直接新垣助祭と話し合って今後の方向性を決めていくことが報告された。
- ・ 第二回信徒評議会でも議題となった経済問題評議会について、司教から各小教区に評議会を設置して、主任司祭と信徒が協力して小教区の会計にも取組むよう提言があった。具体的な会計処理や記載の方法について、津波古事務局長より詳細な解説が行われた。
- ・ 次回の司祭会議は11月5日(火) 15:00~18:00石垣教会で行われる。

2019年10月16日

記録: 新田 選

承認: ウェイン・フランシス・パント司教

「あなたの夢は何ですか？」この間の子ども会で、絵本の朗読の後にシスターは子どもたちに問いかけました。その場にいた私は、「夢・・・？子どものころの夢はお母さんだったな、今はどうだろう・・・ああ、今もお母さんだな」と。ちよつと思議なのですが、私の夢は大人になつた今も子どもの時も同じでした。そのあと、シスターは子どもたちに優しく、しかしはつたいて夢がなければ何も始まらないよね。あきらめるあなたでいますか？あきらめてしまえば、神様が手を差し伸べていてもその手を取ることが出来ないでしょう」と。

私は子どもの頃から、先生たちに「目立ちますねー！」と言われるほど、個性が強すぎる(?)子でした。当時は診断基準がまだなかったのですが、今なら診断がつくかもしれません・・・。そのため、父も母も大変な子育てを強いられていたと思います。子育てを大変だと感じるのみならず、こんな感じで大変でした。：七十才になる父が最近孫である私の子どもたちに語つたエピソード

を起こして、その度に何も悪くないのに家族は家から追い出された。四年生くらいの時はすごく大変で、仕事を終えて家に帰つたら、玄関が開かない。ドンドンたたいたいたら、和美的弟と母親がよその家から出てきて、痲癩のせいで追い出されてるって。ペランダよじ登つて窓から入り「お前が出てけー！山に捨ててやるー」って、和美を引きずつて車に乗せた。泣いて謝るだろうと思つていたけど、山に着いて

子どもの頃の私は、湧き上がる感情を抑えることができず、いつも苦しくて苦しくて。普通に学校に行けばいいだけなのに、洋服ひとつで大爆発！毎日の普通のこと上手くできず・・・あの時は本当はどうすればいいのかからずから、感情に、感情が溢れだすたびに



も泣きもしないでサツサと車から降りて、どんどん走つて山奥に消えていった。真つ暗ですぐに見えなくなつたから、慌てて辺りを探し回つて、近所の人にも頼んで大騒ぎになつた。見つからないから途方に暮れて家に戻つたら、和美はコタツに入つてテレビ観ながらくつろいでいた。やられたーって思いながら、やるなーとも思つてね、もう、その日は怒るのを諦めた。和美は何しろいつたん決めたことは曲げないし絶対にあきらめない。

心の中で「だれか助けてー」と叫んでいました。働きの父と沖繩生まれの優しい母にとてもかわいがられ愛されていたのに！。どんなに愛に満ちた良い家庭でも、私みたいな「大変な子」が生まれることはあるのです。生まれてしまった大変な子である私に、両親は惜しみない愛を注いで丁寧子育てしてくれたのだと今ならわかります。(私は母のようにはできないとも思います。が・・・)

は、家庭と職場という豊かな恵みを受け、他者と互いに支え合っている、毎週子どもたち全員を連れて教会に通い、愛と喜びの中で生きています。社会に生きることができない私になれたのは、母の愛と「求める心」とがあったからだと思えます。子どもの頃から、「こうしたい！こうなりたい！助けて！」と。苦しみの中であつても、願いが聞き入れられないとは少しも思うことなく、無心で求め続けていました。私が子どもの頃、無心で求めていたことは「お母さんになる」という夢で、幼稚園の時にはあやふやなイメージではなく、かなりはっきりして子どもの人數・性別も決まっていました。

高校を卒業する頃には「良い」お母さんになりたいと形容詞がついていたので、進学や職業は「良いお母さんになるために必要か」を基準にして選びました。そして今、私の願いは聞き入れられ「二人の子ども」が与えられ、神様からの贈り物、三人目にも恵まれました。三人の子どもの侍者を行う主日のミサは、イエスがいつも私のそばにいて、しっかりと守つてくれていることを確かめられる時間です。その一時間で私は母として、そして教員としての自分に神が何を任せようとしているのか、イエスが語りかけてくれていることに耳を傾けます。そして起こつたことのすべてをマリア様にお捧げします。苦しかった子ども時代、「和ちゃんの夢は？」と聞かれた時も今も、私の夢は同じです。お母さんになる！

Book カトリック文化センターからお知らせ
2020年カレンダー、手帳の店頭販売開始
 今年もそろそろ、来年のカレンダー、手帳を準備する時季となりました。クリスマス向けの商品や絵本も多数揃え、皆様のご来店を心よりお待ちしております。書籍や信信用具などの販売や注文も承っております。是非、ご利用下さい。
 ●キリスト教関係の書籍、宗教用品等のご利用は、「カトリック文化センター」を通じてご注文下さるようお願いしております。
 〒900-0005 那覇市天久 1-8-7 電話・Fax 098-868-4649

「声」 角笛

マイノリティ・ユース・ フォーラム開催

マイノリティ宣教センター共同主催

金迅野(きむしんや)

去る九月三日から七日にかけて、与那原の聖クララ修道院において、マイノリティ・ユース・フォーラムを開催した。このフォーラムは、マイノリティ宣教センター(東京・早稲田)が主催するもので、マイノリティがいかなる状況のなかでつくりだされてきたのかを学ぶと同時に、いまを生きる自分にとって共通の課題を探ることを目的としている。第三回目になる今回は、カナダ、台湾、韓国を含む、さまざまな背景を持つ若者二十名あまりが集まった。また、カトリックをはじめ、プロテスタントのさまざまな教団を背景に持つ青年たちが集うことがこのフォーラムの一つの特徴となっている。

第一回は大阪で開き、被差別部落の人々、沖縄にルーツを持つ人々、そして在日コリアンが、明治以降、都市化する大阪の街の都市化のための労働力にいか

に動員されたか、同時に周縁に追いやられながらどのような抑圧を受けてきたかを学び、昨年の第二回は北海道を巡り、アイヌ民族の歴史といまについて学んだ。第三回目は今回は、とくに明治以来、日本の近代化のなかで琉球/沖縄がどのように暴力的に「日本」に編成されてきたのか、沖縄戦、米軍支配、日本への「復帰」という権力の変遷のなかで振るわれた暴力がどのようなものであったのか、そして、その暴力が、とりわけ基地という形で人々の命をいかに脅かすものになっているのか、さらには、そのような圧倒的な暴力に対して、沖縄の人々が粘り強くどのように抗って来られたのかを学んだ。

魂魄の塔や南北の塔、恨之塔



アプチラガマ、チビチリガマなどを訪れた若者たちは、権力が民衆を究極的には救わないということ、そのなかでマイノリティが互いの痛みを共感することを通して小さいけれどかけがえない結びつきを示せることから多くのことを学び感じ取ったと思う。佐喜真美術館の「沖縄戦の凶」に描かれた人物たちの目が意図的に描かれていないことが、なにかを見ようとしなれない現代社会を生きる私たちの在り方に警告を発しているのではないかと述べる若者もいた。緑ヶ丘保育園園長の神谷武宏牧師のお話から、過去の暴力の歴史が、いま現実に育ちつつある小さな

いのちを脅かすことにつながっていることを痛感した参加者もいた。

証しや振り返りの時間に語られた多くの言葉たちは、沖縄についての単なる知識にとどまらず、「いきづらさ」を日々感じる自分の実存に食い込んでいく「現実」であることを証ししていた。修道院という素晴らしい環境のもとで、暴力に抗う生き方と私たちの信仰を結びつけて考える者も多かった。協力してください、カトリック教会の方々にも心からの感謝を申し上げるとともに、手厚い接待のなかで真摯に事柄に向き合おうとした参加者にもエールを送りたい。

のパンを頂く姿は、自分たちの幼い頃を思い出し、胸が熱くなった瞬間でした。古川神父様が、初聖体はゴールではなく始まりです、とおっしゃったように、これからも神さまと仲良くなるようお勉強を続けていきたいと思えます。初聖体を受ける前にイエスへあてた子どもたちのお手紙を紹介します。

『イエスさまへ
いつもわたしを見守っていてくれてありがとうございます。わたしはイエスさまをしんじていて、イエスさまが大すきです。白いパンはどんなあじなのか、ドキドキします。もうすぐはつせいたいと思います。とてもドキドキワクワクします。るなより』

アンジェラ 中村瑠那(小四)

教区 NEWS 教会

嬉しい初聖体

開南教会

七月二十八日日曜日のミサの中、古川主任司祭、有馬名誉司祭司式の元、三名の子どもたちが初聖体に与りました。昨年は初聖体を受ける子がいなかった

ので、二年ぶりの大きな祝福でした。準備期間が短く、リーダーたちも初めての事で、不安な勉強会でしたが、神さまの導き

が初聖体に与りました。昨年は初聖体を受ける子がいなかった

ので、二年ぶりの大きな祝福でした。準備期間が短く、リーダーたちも初めての事で、不安な勉強会でしたが、神さまの導き

わたしの名前は、下地レイミです。いつもおまもりしてください。ありがとうございます。今日は、はつせいたいの日です。イエス様の心と一つになって、よみ様のことをすきになって、よいことをたくさんできるようにがんばりますのでいつもおまもりください。おじいちゃんおばあちゃんお父さんお母さんもおめぐみがあ

わたしは、はつせいたいの日です。イエス様の心と一つになって、よみ様のことをすきになって、よいことをたくさんできるようにがんばりますのでいつもおまもりください。おじいちゃんおばあちゃんお父さんお母さんもおめぐみがあ

りますようにおねがいします。レイ
ミより』

フランシスカ下地レイミ(小四)

『イエスさまへ

わたしたちのために生まれてきてく
ださりありがとうございます。おつ
くりになったすべて人げんにあたえ
てくださいありがとうございます。
いつもいえすさまがわたしのちかく
にいてくださることで、うれしいと
きもたくさんあるし、つらいときや
かなしいときは、イエスさまがなみ
だをおさえてくれます。ときどきイ
エスさまをかなしませてごめんなき
い。イエスさまのこともつともつ
としりたいです。わたしとイエスさ
まをあいするすべての人におめぐみ
をおあたえください。ゆなより』

クララ 比嘉友愛(小三)

(教会学校リーダー)島袋尚子)



大分教区平和のつどい

―戦争がもたらすもの―に参加して

大分教区南宮崎教会

カトリック平和旬間に合わせて、大
分教区で平和の集いが開催された。大
分教区(宮崎県と大分県)は九州の
東側に位置し、南北に長い教区であ
る。そのため、八月十一日は大分地区
十二日は宮崎地区と二日間行われ、講
師の一人として、那覇教区事務局長の
津波古陰氏が講演を行った。

津波古氏は「不戦の誓い」と題し
て、沖縄の現状を語ってくださいました。

沖縄県外で暮らしていると、報道
でしか沖縄を知ることができない。
実際に住んで、体験してみないとわ
からないこと、沖縄の人々の本当の
心など、言葉で説明することが難し
い中、とても丁寧にわかりやすく話
していただいた。また、平和巡礼や
魂魄の塔、そして、ウエイン司教様
による「祈り」も紹介され、「キリ
スト者として生きること」と繋がる、
とても有意義な講話であった。

私自身も沖縄で生まれ育ったが、
初めて知ることもあり、学びの多い
時間を過ごすことができた。大分教
区の皆さんにも、沖縄の心が届いた
ことだろう。

私事だが、津波古氏とはサマー
キャンプの参加者およびヘルパーと
して、三十年以上前に出会い、信仰
についてはもとより、祈ることの大

切さや、キャンプのヘルパーとして
心構え等、本当にいろいろなことを
教えていただいた、いわば「恩師」
である。私が那覇教区を離れた今で
も、こうして教会と繋がっていられ
るのは、当時の信仰教育が礎となっ
ていると思っている。

宮崎で暮らし始めて今年でちよう
ど十年。この節目の年にお世話に
なった津波古氏と再会できたこと、
そして宮崎の地で沖縄の話が聞けた
ことを本当にうれしく思い、神様に
感謝の気持ちでいっぱいである。沖
縄という小さな島から、「愛があふ
れる沖縄の心」を伝え続ける津波古
氏のこれからの活躍と、ウエイン
司教様率いる那覇教区のますますの
ご発展を、ちよつと離れた宮崎県で、
心から祈っている。

中村雪乃(旧姓名富)

計 報

◆読谷教会

マリア 雨水 千代子 様

二〇一九年九月三十日帰天

享年一〇五歳

◆コザ教会

モリカ 上間 敬子様

二〇一九年十月五日帰天

享年九十八歳

◆与那原教会

ヨセフ 宣保 隆様

二〇一九年十月九日帰天

享年七十七歳

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

- *創業30数余年・・・。
- *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるための
お手伝いをさせていただいております。
- *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。
「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく
☎098-853-1059



葬祭の

「やすらい企画」



私たちは故人とご遺族の意向
を最優先に考えます。何でもご
相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付